

(ログライン)

裁判官を夢見る主人公は事故で死亡するが、地獄で開催される歴史上の人物専用の裁判、「歴史裁判」において、弁護役を引き受ければ生き返れるといわれ挑戦することに。

(少し長め)

幼い頃から父親に正義を貫けと教えられ裁判官になることを夢見る主人公は事故で十代の若さで死亡する。

その頃、極楽は経営が悪化していた。

原因は、観光資源となる歴史上の英雄が皆地獄に行ってしまうためだった。

ちょうどその時「歴史裁判」が行われる。

歴史裁判とは、歴史上の人物専用の裁判で彼らの極楽行きを掴み取ることができる

最後の裁判だった。

主人公は、この裁判で弁護士役を引き受けて英雄たちの減刑を勝ち取れば

生き返らせても良いと条件を出される。

多くの人を殺してきた英雄たちの弁護するか悩むが、結局引き受ける。

こうして、地獄の利権を守るため不正をしてでも有罪を勝ち取るうとしてくる閻魔検事と、裁判長アマテラスがいる地獄へ向かう。

日本史 最後の審判

登場人物

花散里 蛭・主人公。弁護士のお卵。
十代の女の子。



ス・天国や地獄で使われる、スマホみたいなもの。
スマートミラー。主人公の相棒。

地獄にあると言われる真実を移す鏡「浄玻璃の鏡」を模した量産型のような存在。
地獄の住人はスマホのような感覚で連れて歩く。
主人公が、天国側から支給されたものだが、訳あって故障しており、
写すデータが破損している。自分の意思で喋るが、歴史の知識などはない。



天・最高神アマテラス、裁判長役

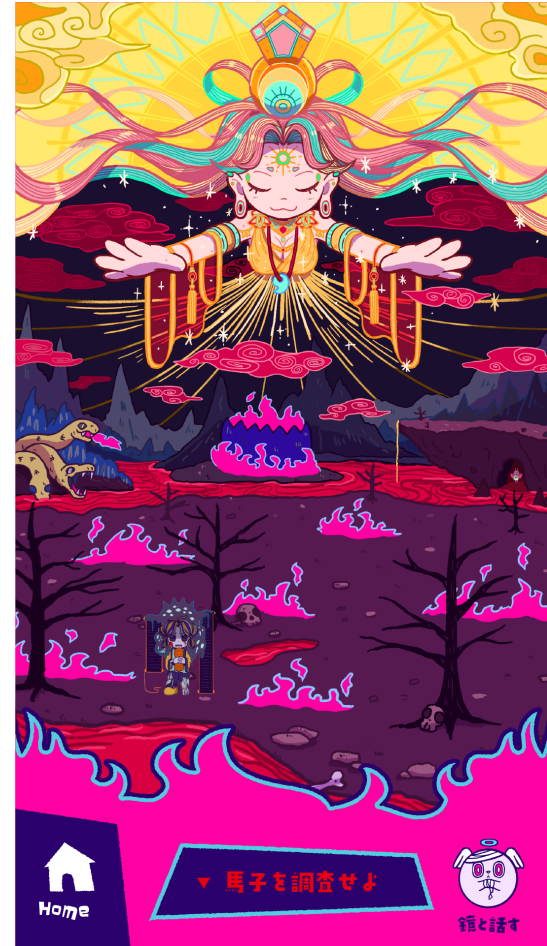


閻・閻魔王、検事役



鬼・地獄に住んでいる小鬼。
名前はノンベ。





主人公
花散里 蛍



相棒
スマミ

主「き・・・緊張してきた・・・。」

ス「蛍ちゃん！」

主「スマミちゃん!!」

ス「どうしたの？」

キンチョーしてるの?」

主「だって・・・。」

『歴史裁判』の話は聞いたけど、いざとなると緊張するよ。」

ス「それは誰でも一緒だよ。」

今回の歴史裁判は

1500年ぶりだからね。」

前回を知ってる人の方が珍しいよ。」

主「そうだね。」

一緒に頑張っていこうね。」

ス「でも、初めての歴史裁判で

弁護する相手・・・

運が悪いよね・・・。」

だって今回弁護する人、よりによって殺した相手が

『天皇』でしょ?」

流石に弁護できないんじゃないの?」

主「・・・まあ、そっなんだけど、

あ、噂をすれば・・・。」

閻魔ちゃんもおはよう。
1500年ぶりね。
私が目覚めたということは
歴史裁判を開くということですね。
では検事役の閻魔ちゃん。
念の為、裁判のルールを
みんなに説明してちょうだい。」

閻 「かしこまりました。
本来の裁判は、無罪か有罪かを明らかにする。
しかし歴史裁判は違う。
裁かれるのは**歴史上の人物**のみだ。
彼らは無罪とは無縁の人間だ。
直接人を殺す、
誰かに命じて人を殺す、
身勝手な政治で、
数えきれない人を死に追いやる、、。
殺人のデパートだな。
まさに『英雄功成りて、万骨枯れる』だ。」

主 「え、、どういことですか?」
閻 「嫌だねえ、教養がないというのは。
『英雄功成りて、万骨枯れる』
『えいゆうこうなりて、ばんこつかれる』
一人の英雄が歴史に名を残した陰で
多くの名もない人が犠牲になっている、
ということだ。
当然彼らは、地獄行きになる。
が、、救いがないわけではない。
アマテラス様がお目覚めになった時に
開かれる特別な裁判、、、
すなわち『**歴史裁判**』だ。」

天 「歴史上の人物たちは
権力を握る過程で
何かしら悪事を働いているわよね。
でもその後、権力を使って
世の中に貢献していれば
それを功績とみなして
助けの手をさしのべちゃおう
というわけ。」

閻 「減刑が認められ
この無限地獄から抜け出し、
天国へ行くことができる。」
天 「では確認をかねて私から質問するわね。
被告人(ひこくにん)は
どんな人かわかるかしら?」

主 「えっと被告人は・・・」

※プレイヤーに選択肢

【裁判にかけられている罪人】

【罪人の有罪を証明する人】

【罪人を弁護する人】

【裁判にかけられている罪人】が正解

主 「裁判にかけられている罪人です。」

閻 「一般常識だな。
ちなみに私は閻魔検事だ。
検事（けんじ）が何なのかは、
当然わかるな？」

主 「えっと検事は、、、」

※プレイヤーに選択肢

【罪人の有罪を証明する人】

【罪人を弁護する人】

【罪人の有罪を証明する人】が正解

主 「罪人の有罪を証明する人ですね。」

閻 「そしてアマテラス様は、
裁判長だ。

最終的な判決を決める方だな。」

天 「私に、『この被告人可愛そう！

助けてあげたい！』

って思わせたら

蛭ちゃんの勝ちよ。」

主 「そして私たちが

罪人を弁護する人、

弁護士（べんごし）だね。」

ス 「その通り。」

天 「準備はできたようですね。

ではこれより

「人目の歴史裁判を

開廷します。」

閻 「こちらは問題ありません。」

天 「では閻魔ちゃんに

冒頭陳述をしてもらいましょう。」

ス 「冒頭陳述？」

主 「検事である閻魔大王が、

被告人の悪事を、

簡単にまとめて述べるんだよ。」

ス 「り、了解！」

閻魔の冒頭陳述

★閻 「今から千四百年ほど前。
奈良の都の出来事だ。」

★閻 「被告人の名前は

蘇我馬子（そがのうまこ）」

★閻 「馬子は政治上のライバルを
次々に殺害した。」

★閻 「さらには「絶対に殺してはならない人」

まで殺害した。」

★閻「馬子は、邪魔者を殺し、政治を私物化する極悪人である。」

★ス「まずは情報を集めない」と。

★主「追加で情報が手に入るかもね。」

今から千四百年ほど前。

奈良の都の出来事だ。

に聞き込み

←

閻「被告人が生きた時代は

西暦の〇〇年前後だ。

当時日本の中心だったのは

現在の奈良県だな。」

ス「奈良県がだいたい

どの辺なのかわかる？」

※日本地図表示

プレイヤーに選択させる。

ス「日本の真ん中あたりか。」

主「当時の都は東京じゃないんだね。」

ス「東京はその頃、

まだ水びたしだったらしいよ。」

閻「湿地帯（しっちたい）とか

言ったらどうだ。

その頃東京はまだ

ど田舎だ。」

主「とにかく昔の奈良で

権力を握っていた人が

今回の被告人だね。」

被告人の名前は

蘇我馬子（そがのうまこ）

に聞き込み

←

閻「当時たくさんいた有力者達の中で

最有力だった一族・蘇我氏のトップだ。」

馬子は政治上のライバルを

次々に殺害した。

に聞き込み

←

閻「蘇我氏は有力な一族だったが

ライバルがいなかったわけじゃない。

だが邪魔者は次々に消されていった。」

主「馬子さんに殺された、ってことか。」

閻「最大の被害者は

物部守屋（もののべ もりや）

という有力者だ。」

神話の時代の神様を
先祖に持つ一族だ。
信心深い男で、
宗教関係の行事なども担当していた。」

天「あら、神様を大事にする人は
好感を持てるわね。
たとえそれが私じゃない
神様でもね。」

※人物カードを取得



物部守屋(もののべもりや)
今回の被害者の1人。
日本の神話時代から続く名
族。信心深い人で、宗教の行
事なども担当していた。

さらには「絶対に殺してはならない人」
まで殺害した。
に聞き込み

主「馬子さんを弁護できるかどうか・・・
ポイントの一つだね。」

閻「馬子は当時の天皇を部下に命じて殺害した。
その上、その部下も口封じで殺した。
長い日本の歴史の中で
天皇殺しをやった家臣は
馬子ただ一人だ!」

主「なんて言う天皇だろうね。」

又「きいてみようか?」

※選択肢提示

【聞いてみよう】

【いや、やめておこう】

【聞いてみよう】を選択

又「でも・・・」

こつちに知識がないって
告白するようなものだよ。」

【いや、やめておこう】
ス「そ、そうだね。」

向こうにナメられちゃうかも。」

主「情報は後で自力で集めよう。」

※人物カードを取得



???

蘇我馬子に殺された天皇が
いるらしい・・・。

馬子は、邪魔者を殺し、政治を私物化する
極悪人である。
に聞き込み

主「確かにそう言われても仕方ない。」

ス「同僚を殺す、

上司は殺す、

部下も殺す。」

主「これは・・・凄まじいな・・・」

※閻魔の冒頭陳述に対して
全て聞き込みが終わったら
強制的に次のセリフへ

天「どうですか、蛭ちゃん。

繰り返すけれど

これらの悪事は事実よ。

弁護の余地なんてないの。

問題はその後・・・」

主「そうやってまで握った権力で
何か成し遂げたのか？」

天「その内容次第では

減刑の判決を与える。

でもあなた達が失敗すれば、

被告人は永遠に

地獄の住人になっちゃうわ。」

主「被告人には最後のチャンスですね。調査の時間をください。」

必ず馬子さんを救ってみせます。」

場面 裁判場(アマテラスの前)から一度抜け出し、
情報集めをしようとする二人

主「とにかくまずは情報を集めよう。」

ス「まずは被告の馬子さんのところだね。」

主「馬子さんはどこにいるの？」

ス「ここだよ。」

※画面上の馬子の場所、赤枠で強調

ス「見にくければ、拡大してみてね。」

【タスク】

被告人・蘇我馬子のところへ行くこと

ス「とにかく馬子さんの情報を集めないとな。馬子さんを探してタップしてみよう。」

※プレイヤーに馬子タップしてもらおう

場面 被告蘇我馬子のところへ行く主人公。
最初に管理人である小鬼と少し話す。

主「おお、やってるやってる。」

ス「馬子さん、責められてるね。」

小鬼「えっと・・・あなたたちは？」

主「歴史裁判の弁護士だよ。」

鬼「僕はここを管理してる鬼の子だよ。名前はノンベ。」

主「馬子さんのことを調べてるんだよ。」

鬼「ああ！

天国側から依頼された弁護士！？
だから天国製のスマミを連れてんだね。」

主「？！スマミちゃん、この子と知り合い？」

ス「違うよ。」

初めて蛭ちゃんと出会った時
僕、「スマミだ」って名乗ったけど
「スマートミラー」の略だよ。」



鬼の子
ノンベ



主「スマホみたいなもんか。」

ス「壊れてるけどね。」

電波キャッチできない。」

主「ちよ、ちよっと、」

ス「でもデータとかは

表示できるから大丈夫だよ。」

鬼「いいなあ。」

僕もスマミ持ちたいな。」

ス「何か知ってることが

あったら教えてよ。」

鬼「僕は管理をしてるだけだから・・・

あまりお役には立てないかと・・・。」

主「知ってることだけでいいよ。」

※選択肢提示

✔【あなたは？】

鬼「僕の名前はノンベ。」

鬼の子だよ。

このオーダーメイド地獄の

管理を任されてるの！」

※選択肢が増える

✔【あなたは？】

✔【オーダーメイド地獄？】

鬼「歴史上の人物が死んだ後に来るのが

この地獄だよ。」

なにせ普通の人とは違うからね。

責め苦の内容も特別なんだ。」

主「特別・・・っていうとっ？」

鬼「その人物が生前におこなったことに

関係ある責め苦になるんだよ。」

一人一人に合わせて作られた地獄、

オーダーメイド地獄、だよ。」

僕はその管理人なの。」

今日も元気に責め苦を受けてるかどうか、

異常がないかチェックしてるんだ！」

主「情報を知ってたら教えてくれないかな。

わかる範囲でいいんだ。」

鬼「うーん。」

僕は一応、閻魔様の部下だからなあ。

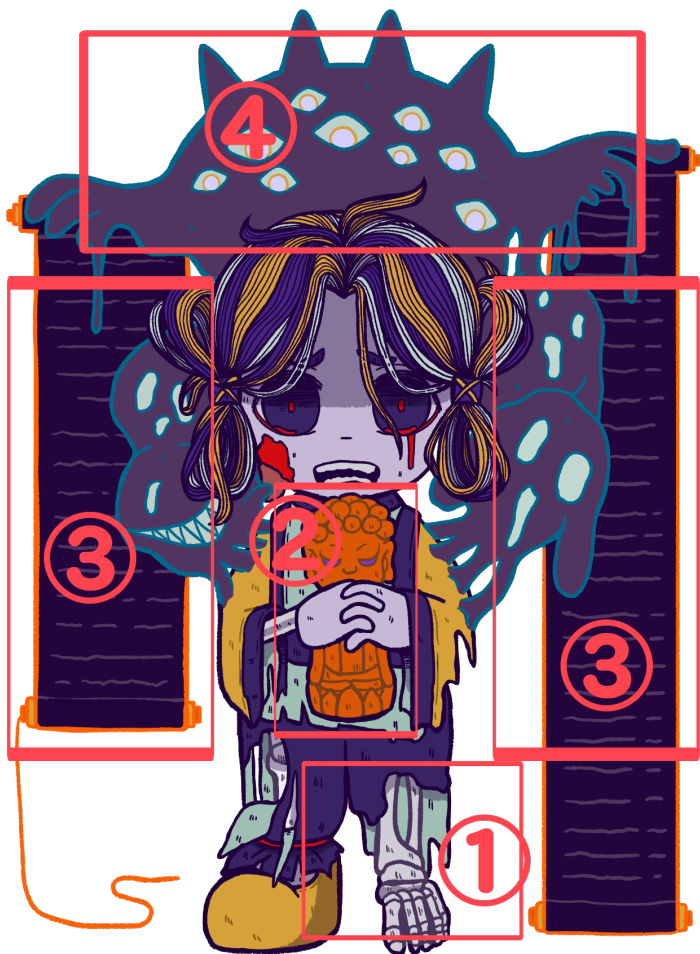
それに僕あまり歴史の事、知らないし。

閻魔様から、少し話を聞いてるだけ。」

主「それもでいいよ。」

鬼「・・・うんわかったよ。」

馬子さんのことで気になる部分があったら
タップしてみてください！



※1についてタップされた場合

主 「骨が見えてゾンビ化してる・・・」

鬼 「当時の『高貴な身分の人』の
お葬式に関係があるんだよ。
馬子さんってすごく身分が高い人を
殺してるよね？
えっと・・・誰だっけ？」

主 「教えてあげないと、話が進まないね。」

ス 「今まで手に入れた人物カードから
選択してみよう。」

※2天皇人物ファイル選択

鬼 「そうだったね。
馬子さんは天皇暗殺後、
すぐに『土葬』、
つまり土に埋めて
埋葬しちゃってるんだよ。」

ス 「何か問題があるの？
！火葬しなきゃいけなかったとか？」

鬼 「当時は天皇が亡くなった時には
『もがり』をするのが普通なの。」

主 「もがりっ？」

鬼 「高貴な人が亡くなると、
すぐには埋葬しないのが

当時の常識だったんだ。
棺の中に放置して、
腐敗して白骨化するのを
見届けるんだよ。」

主「そ、それ自体が地獄の儀式なんだけど・・・」

鬼「当時はそれが偉い人に対する
正しい儀式方法だったんだよ。」

主「時代が変われば
常識も変わる、か。」

鬼「馬子さんはその儀式をせずに
すぐに土葬させたんだ。
このまま放置すると
恨みが元になって祟りをなす、
って考えたらしいよ。」

主「その報いとして
もがりされてるのか。」

馬子「い、痛い・・・」

ス「やっぱり痛いんだね。」

鬼「まあ意識はうつすらあるからね。」

主「早く助けてあげたいね。」

ス「ちなみに暗殺された天皇の
名前は思い出せない？」

鬼「思い出したよ。」

崇峻(すしゅん) 天皇だよ。」

主「ありがとう!!」

※人物ファイルを、書き換える
人物ファイルの名前
?????↓崇峻天皇



崇峻天皇(すしゅん)

蘇我馬子に殺された天皇。



※2について

主「この仏像は何？」

鬼「信仰心が強い人だったみたいだからね。
渡来人からもらったのかな。」

主「!? 渡来人？」

「渡って来た人」ってこと？
どこから？」

鬼「朝鮮半島だよ。」

当時の日本には
大陸からやってきた渡来人が
結構いたみたい。」

主「朝鮮半島というところ……
どこだろう？」

※アジアの地図が出る
場所を選択

主「馬子さんは、その渡来人達と
仲が良かったの？」

鬼「みただよ。」

仏教はインド生まれだよね。
そこからアジアに広がったらしいけど。
そういう海外の情報も
知ってたみたい。」

ス「でも仏像も

あまり効果はないみたいだけど。」

鬼「心の支えにはなってるんじゃないかな。」

※ファイル馬子書き換え

蘇我馬子(そがのうまこ)

今回の被告。

仏像を大事に抱えて、
意外に信心深い人のようだ。



※3について

主「これは何かな？」

鬼「馬子さんが生前作った
制度に関係するらしいよ。」

ス「つまり馬子さんの業績だね！
ぜひ教えて。」

鬼「・・・うーん。
かまわないけど・・・
本当に聞く？」

主「！？」

鬼「あまりイメージのいい制度じゃないな・・・」

ス「聞くのが怖いけど・・・
どんな内容？」

※余白にボタンが表示される
どちらでも先に選べる

【身分制度を強化する制度】
【天皇に従えと書かれた制度】

【身分制度を強化する制度】を選んだ場合

鬼「人を階級に分けて
支配するんだよ。
まず12種類の色の冠を
用意するの。
そして階級ごとにそれをかぶせる・・・」

主「それは・・・自分のテストの成績を
廊下どころか、
頭に乗つけて歩くってこと？」

ス「で、でせ
能力で人を選ぶのは
いいことじゃないかな。
公平だし。」

鬼「・・・馬子さんは
どの階級だと思っ？」

※プレイヤーがボタンを選ぶ場面

【一番上】

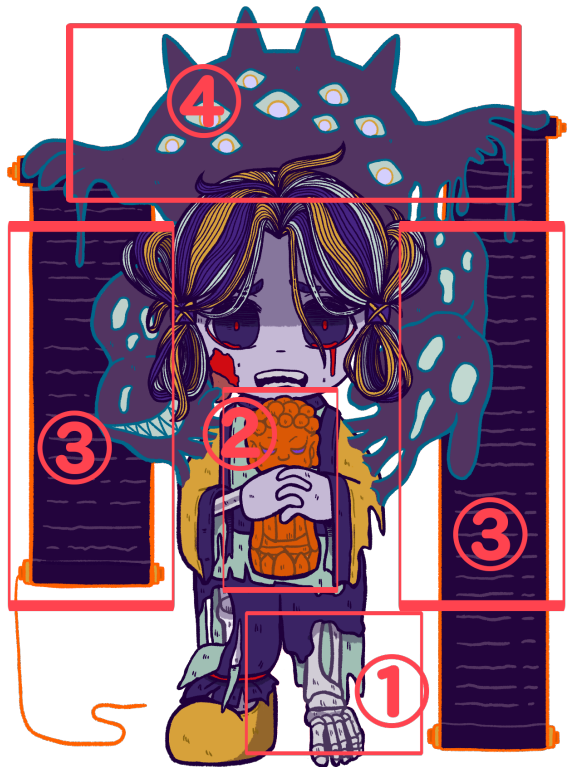
【一番下】

【実は知らない】

鬼「一番上だよ。」

ス「馬子さん、優秀だね。」

鬼「違うよ。」



馬子さんは冠を与える側。
だから無条件で一番上。」

主「・・・しよ、しよっけんらんよう・・・」

鬼「それ実際は、

有力者の身内かどうか、
とかが関係してみたい。」

主「立派なのは建前だけ・・・か。」

※証言ファイル更新



???

馬子に関わった制度。
能力によって人を12階級にわけ、色違いの冠をかぶせるらしい。
馬子は1番上。

【天皇に従えと書かれた制度】を選んだ場合

鬼「閻魔様が持ってたコピーを
読んだことがあるよ。」

ス「内容は？」

アマテラス様が感心するような
立派な内容？」

鬼「うーん。どうかなあ。

天皇に従え、ってかいてあったな。

あとは・・・そうそう・・・

お役人は朝早く出てきて

しっかり働け、だって。

夕方遅くまで帰るなって書いてあった。」

主「人々を社畜にする気
満々だね。」

鬼「お説教が、17個もあったらしいよ。」

主「天皇の言うことを聞け、か。」

ス「天皇を殺してみたり、
従えて言ったり。
大事にしてるのか、見下してるのか、
どっちなんだ。」

鬼「実は、、当時の天皇は、
馬子さんの身内なんだよね・・・」

主「殺した天皇の後継者？」

鬼「そうだよ。」

馬子さんがそうさせたの。」

ス「天皇を殺すわ、

身内を天皇にするわ。

やりたい放題だね。」

主「天皇に従えてことは、そのバックにいる
自分に従えてことか・・・」

※証言ファイル更新



???

馬子に関わった制度。
天皇に従え、朝から晩まで働
け、など17項目の説教あり。
当時の天皇の後ろにいるのは
馬子。

※4について

ス「今日もお願いしますね。
祟り神の皆さん。」

※怨霊が蠢くS10が入る

鬼「こつやって24時間体制で、
馬子さんに不安と悪寒を
与え続けてるよ。」

ス「いっばいっいてるね。」

主 「たくさん殺したみたいだからね・・・」

※蘇我馬子の4箇所を全て読むと強制的に次へ再度小鬼登場

鬼 「弁護士さんは、馬子さんの弁護を引き受けるんでしょう？でも・・・難しいと思うよ。馬子さんは国内の政治でもこんな感じだけど、それ以外もあまりよくないって聞いているから・・・」

主 「それ以外って？」

鬼 「・・・いや、なんでもない・・・とにかく頑張ってるね。」

※必要な情報を全て取得したら強制遷移

場面 調査画面を終え、一度メインに戻る。

これからスマミが持っているデータを検証する、と会話する二人

主 「他に調べるべき情報は・・・」

ス 「天国から地獄にくる時にちょっとだけ資料を入れてきたよ。」

主 「よし！次はそれを検証してみよう。」

※家系図、年表、地図があるまずは家系図

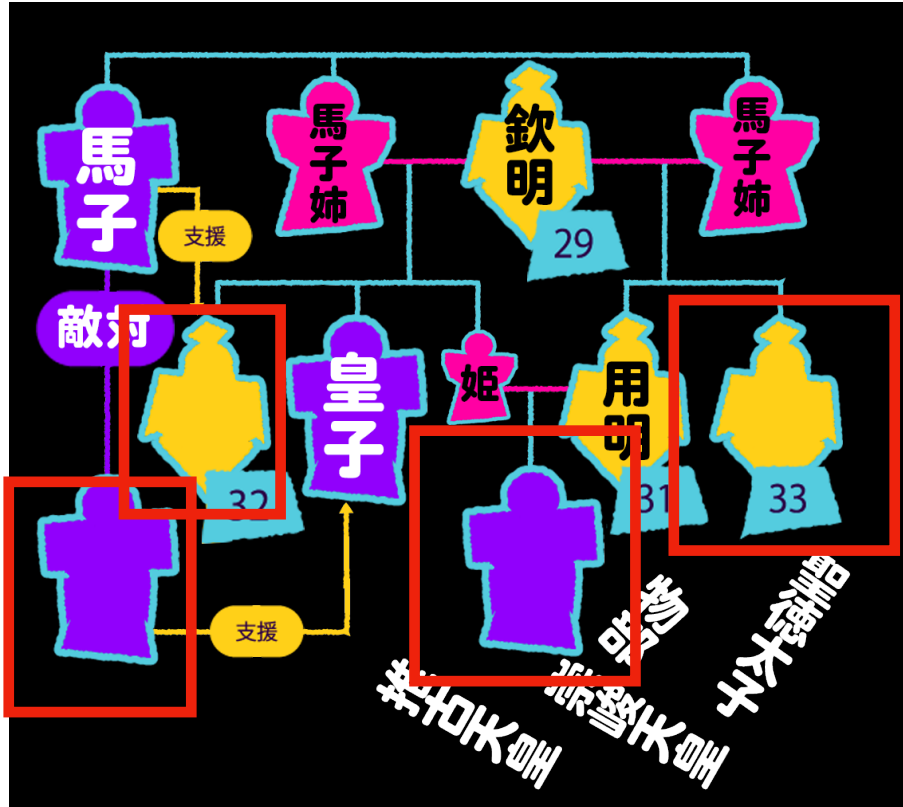
主 「馬子さんを中心とした家系図みたい。データがバグってる！」

ス 「ほ、ほんとだ。ちょっとお腹が「ロ」口するなあと思ってたけど・・・ごめんね。」

主 「大丈夫！なんとかしてみよう。」

ス 「4人分の名前が空欄になってる・・・」

主 「右下の4人がそこに入る



ってことだね。
順を追って見ていこう。」

ス「まず馬子さんを探してみよう。」

※プレイヤーに家系図をタップさせる
「馬子」の部分にタップさせる

主「左上にいるね。」

ス「馬子さんの横に線が伸びてるね。」

この場合はどんな関係を
表してるんだろっ。」

※馬子の横に伸びている線を
赤枠で強調

※プレイヤーの選択

- 1 親子
- 2 兄弟・姉妹
- 3 夫婦

間違えた場合

ス「馬子の上から出ている線・・・

繋がっているのは

馬子さんのお姉さん・・・

ということっ。」

主「馬子さんから線が横に伸びて

馬子さんのお姉さんが書かれている。

ということは**兄弟または姉妹**だね。」

ス「枠の色はどんな意味が？」

主「青色は・・・」

※プレイヤーの選択

- 1 男性
- 2 女性
- 3 天皇

間違えた場合

ス「青枠に入っているのは

馬子さんだね。」

馬子さんと一致するのは・・・」

ス「じゃあ、じゃあ、

赤枠は何？」

※プレイヤーの選択

- 1 男性
- 2 女性
- 3 天皇

間違えた場合

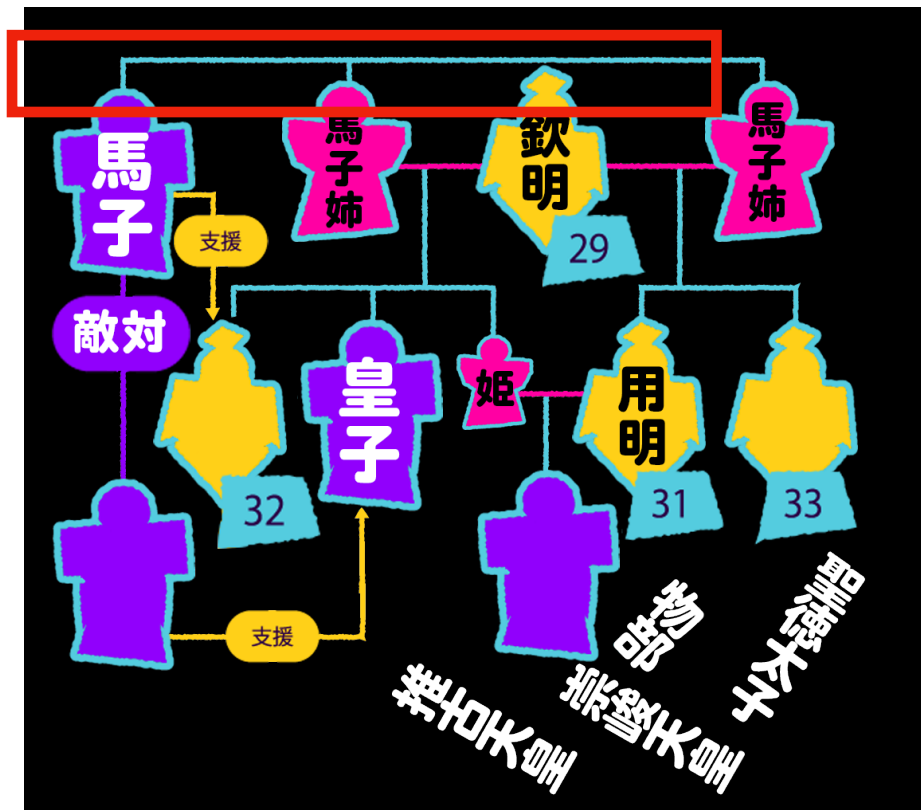
ス「赤枠に入っているのは

馬子のお姉さん

その下には「**姫**」つてもあるね。

一致するのは・・・」

主「黄色は・・・」



※プレイヤーの選択

- 1 男性
- 2 女性
- 3 天皇

間違えた場合

ス「男性は青枠だよな？
女性も赤枠だし。
何か特殊な人なのかな。」

ス「黄枠の上の数字は・・・」

※プレイヤーの選択

- 1 即位した年
- 2 死んだ年
- 3 何代目の天皇か

間違えた場合

主「数字は、ほとんど
順番になってるね。」

ス「欽明天皇と馬子さんのお姉さんの間に
赤い線が引いてあるけど。
この関係は・・・」

※該当部分を赤枠で強調

※プレイヤーの選択

- 1 親子
- 2 兄弟・姉妹
- 3 夫婦

主「赤い線で結ばれているのは
夫婦だろっね。」

ス「じゃあこの縦方向に書かれている
線は？」

※プレイヤーの選択

- 1 親子
- 2 兄弟・姉妹
- 3 夫婦

間違えた場合

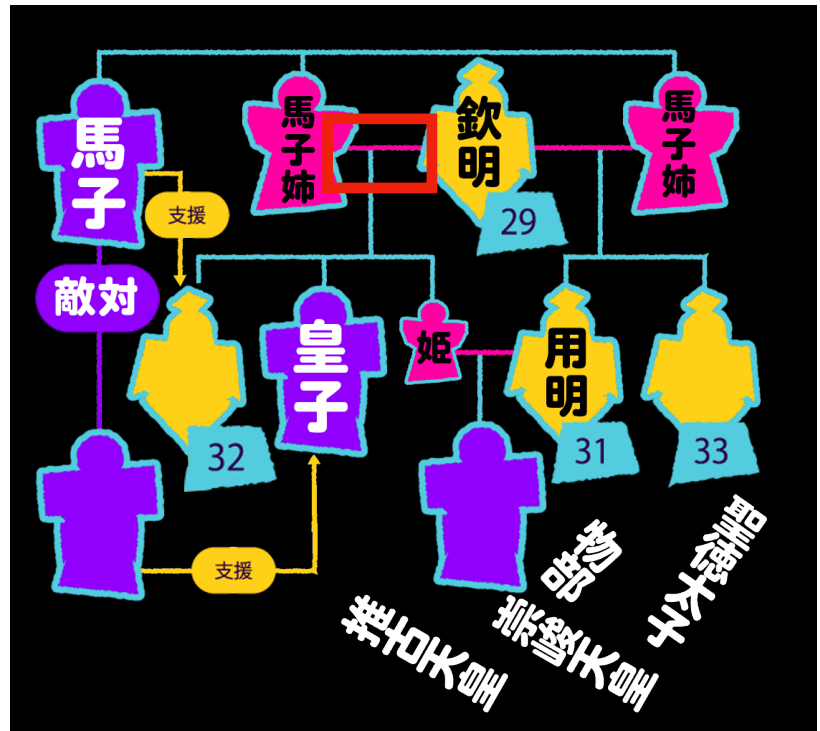
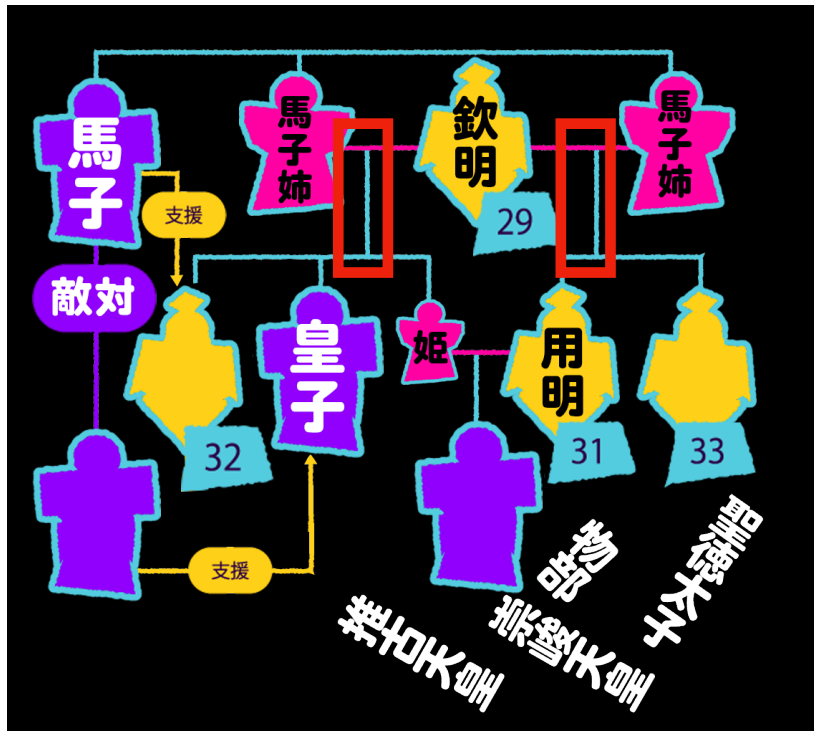
ス「欽明天皇と馬子姉は
夫婦だよな。
その間から出ているんだから・・・」

主「これは親子、かな。」

それ以外にもお互いの関係が
書いてある部分【敵対・支援】もあるね。」

ス「これが家系図の基本的な見方だね。」

主「まずは家系図を完成させよう。」



ス「無理だよ！
そんな知識ないし。」

主「諦めないで。

わかることから

一つ一つ確認して

考えてみよう。」

ス「う、うん。

誰からうめていこうか。

人名を選んでみて！

誰でもいいよ。」

※色々な道順があるが
そのうちの一つを記述

崇峻天皇を選択した場合

ス「馬子さんに殺された天皇だね。」

主「天皇枠は二つ。

でもどちらに入るのか

情報は全く無し。」

ス「じゃあ・・・無理・・・」

主「スマミちゃん！！

よく考えよう。

崇峻天皇は

馬子さんに殺されてるんだよね。」

ス「右の黄枠には全く情報がない。

！？」

左の黄枠は・・・！？」

馬子さんから支援されてる？」

主「どうしよう。」

※プレイヤーが直接家系図の空欄部分をタップ

プレイヤーが右の黄枠を選んだ場合

主「左の黄枠は、馬子さんが支援してるもんね。」

ス「となると消去法で右側だね。」

主「そしてもう片方には

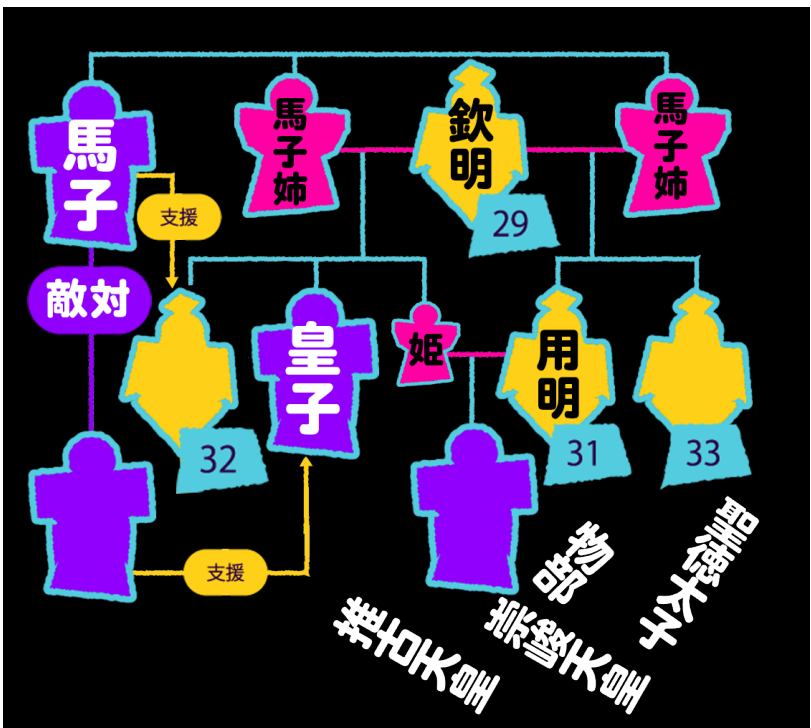
推古天皇が入るね。」

※右の黄枠に、崇峻天皇入る
自動的にもう一つは推古天皇が入る

主「・・・」

ス「どうしたの？」

主「ちょっと気になるんだけど・・・」



この2つの天皇枠なんだけど。
これどっちも馬子さんの身内じゃない？」

ス「2人とも馬子さんのお姉さんの子供だね。」
主「自分の兄弟の子供、
お姉さん……」

※プレイヤーの選択

- 1 いとこ
- 2 孫
- 3 おい・めい

主「自分の兄弟の子供は、
男の子ならおい、
女の子ならめいだね。
馬子さんは、天皇殺しただけじゃなくて
身内殺し、なんだね。」

※カード更新



崇峻天皇(すしゅん)
蘇我馬子に殺された天皇。
馬子の身内にあたる人物。

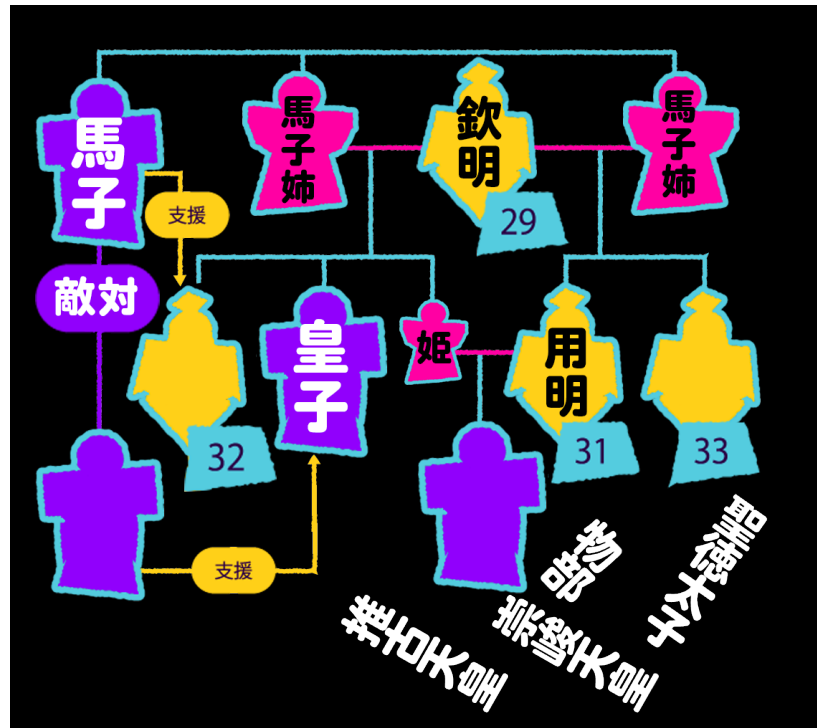
聖徳太子を選択した場合

ス「この人……誰？」

主「でも『太子』だよな。
太子って『皇太子』とかの太子だよな？」
太子って……」

- 1 天皇を補佐する人
- 2 天皇を継ぐ人
- 3 天皇の先生

主「皇太子って天皇のあとを
つぐ人のことだよな？
『○○天皇』じゃなくて
太子と書かれている、ってことは
天皇になる前に



って聞いたことあるよ。」

主「それが600年ぶりに統一されたんだから
大ニュースなのか。
日本にも影響があったのか・・・」

ス「どんな影響？」

主「それをこれから考えるんでしょ？」

●587年を選択した場合

主「馬子さんの悪事の一つだね。」

ス「どうして物部さんと争ったのか・・・
原因は現時点で不明・・・だね。」

主「理由なんかあったのかな？」

ただ一番になりたかった
だけじゃないかな。」

ス「自分の権力のためだとしたら・・・
より感じ悪いね。」

●593年を選択した場合

主「本当にとんでもないことしてくれたよ、この人は。」

ス「暗殺の原因も今の所不明だね。」

主「推古天皇が即位したのは
崇峻天皇が暗殺されたから、
なんだね。」

ス「推古天皇も自分の身内だから

即位しても問題なかったんだね。」

※家系図で推古と崇峻の位置を間違えてくれた場合
主「(あれ!?)

だとするとさっきの家系図
おかしくないかな?
あとでチェックしよう)」

●598年を選択した場合

ス「こうくり、って何？」

主「地図に載ってたよ。

国名だね。

遠征ってことは、

攻め込んでるんだね。」

ス「それも『第1回』だった。」

主「ここには書いてないけど」

2回目もあるってことだね。

苦戦してたみたい！」

※証言カード取得

隋(ずい)

中国にあった当時の先進大国。
高句麗に遠征している。

- 581年 隋(ずい)が300年ぶりに天下統一
- 587年 馬子が物部守屋を滅ぼす
- 592年 馬子が崇峻天皇を殺害
その後、推古天皇即位
- 598年 隋が、高句麗(こうくり)へ第1回遠征
- 600年 日本から隋へ使者を送る?
(日本側には記録なし、中国側にはあり)
- 603年 冠位十二階を制定
- 604年 十七条の憲法を制定
- 607年 再び隋へ使者を送る
- 626年 馬子死去

●600年を選択した場合
ス「これってどういう意味？」

主「そのままじゃないかな？」

日本が中国の隋へ使者を送ったけど、
中国はそのことを記録したけど、
日本はしなかった・・・」

ス「なんで？」

自分で送ったんでしょ？」

主「記録ミス？」

もしくは日本側に都合の悪い事でも
あったのかな。」

ス「これは馬子さんと関係があるのかな。」

主「当時の日本を仕切ってたのは

馬子さんだろうし。

使者を送るのにも

関係してたんじゃないかな。」

※情報ファイル更新

隋への使者(600年)

日本から隋へ使者を送った？
しかし日本側には記録がない。
中国側には記録あり。

●603年選択した場合
ス「なんだろう、これ。」

冠？位？」

主「ひよっとしてこれのことかな？」

※証言カードの中から特定のカードを選択すると更新



冠位十二階

馬子に関わった制度。
能力によって人を12階級にわけ、
色違いの冠をかぶせるらしい。
馬子は1番上。

- 581年 隋(ずい)が300年ぶりに天下統一
- 587年 馬子が物部守屋を滅ぼす
- 592年 馬子が崇峻天皇を殺害
その後、推古天皇即位
- 598年 隋が、高句麗(こうくり)へ第1回遠征
- 600年 日本から隋へ使者を送る？
(日本側には記録なし、中国側にはあり)
- 603年 冠位十二階を制定
- 604年 十七条の憲法を制定
- 607年 再び隋へ使者を送る
- 626年 馬子死去

主「名前が分かっただけでも前進かな。」

●607年を選択した場合
ス「なんだろう、これ。」

主「ひょっとしてこれのことかな？」

※証言カードの中から特定のカードを選択すると更新



十七条の憲法

馬子関わった制度。
天皇に従え、朝から晩まで働
け、など17項目の説教あり。
当時の天皇の後ろにいるのは
馬子。

●607年を選択した場合

ス「600年に続いて

また使者を送ってる。」

主「600年に送った時は日本側は

それを記録しなかった。

でも今回はそんな注意書きはない。

特に・・・意味はないのか？」

隋への使者(607年)

再び日本から隋へ使者が送られ
た。

- 581年 隋(ずい)が300年ぶりに天下統一
- 587年 馬子が物部守屋を滅ぼす
- 592年 馬子が崇峻天皇を殺害
その後、推古天皇即位
- 598年 隋が、高句麗(こうくり)へ第1回遠征
- 600年 日本から隋へ使者を送る？
(日本側には記録なし、中国側にはあり)
- 603年 冠位十二階を制定
- 604年 十七条の憲法を制定
- 607年 再び隋へ使者を送る
- 626年 馬子死去

●626年を選択した場合
ス「馬子さん、死んでる・・・」

主「この年表で確認できる馬子さんが
関係しているような業績は、」

600と607年に隋に使者を送る
603 冠位十二階制定
604十七条の憲法
くらいかな。

ス「問題は、これらのことが
日本の歴史に貢献したかどうか、だね。」

※全て読んだ場合、強制的に次へ

※崇峻天皇と推古天皇が逆の場合、一度家系図へ

ス「ひとまず家系図に戻って
うめられる部分を
完成させよう。」

※家系図へ戻る

※推古・崇峻を正しい位置へ

主「でもわからないな。

この家系図で見ると
馬子さんは崇峻天皇を
支援してた、って
書いてあるよ。」

ス「・・・何かの情報が間違っているのか・・・」

場面 これで調査は一通り終了したが、

最後に小鬼と少し話をする

※小鬼再度登場

鬼「調子はどう？」

主「そつえば・・・。

さっき「国の中の政治」も

よくなかった、

って言ったよね。

その言い方だと、

他に悪いことがあたまみたいだけど・・・。

ひよっとしてノンベちゃんは、

このことを知ってるんじゃないの？」

※情報ファイルから、「隋への使者 600年」のカードを提示

鬼「う、うん。」

閻魔様はあまりいいこと言ってなかったな。

まず最初に中国に使者を送ったの・・・。

でも・・・

日本の政治が幼稚で意味不明だった

馬鹿にされたらしいよ。

恥だから、記録にも残せなかったらしいの。」

ス「年表の通りだね。」

※証言ファイルを赤色に更新



隋への使者(600年)

日本から隋へ使者を送ったが
中国側に馬鹿にされたらしい。
しかし日本側には記録がない。
中国側には記録あり。

- 581年 隋(ずい)が300年ぶりに天下統一
- 587年 馬子が物部守屋を滅ぼす
- 592年 馬子が崇峻天皇を殺害
その後、推古天皇即位
- 598年 隋が、高句麗(こうくり)へ第1回遠征
- 600年 日本から隋へ使者を送る?
(日本側には記録なし、中国側にはあり)
- 603年 冠位十二階を制定
- 604年 十七条の憲法を制定
- 607年 再び隋へ使者を送る
- 626年 馬子死去

鬼「数年後また送ったらしいの。」

主「多分これのことだ。」

※の07年隋への使者ファイル選択

鬼「けど今度は、持参した手紙が
すくなく無礼だったらしくて
隋の皇帝を怒らせちゃったらしい。
ここに書き写しがあるよ。」

【日が昇るところの天子から
日が沈むところの天子に
お手紙を送ります】

主「天子って？」

鬼「『天命を受けて国を治める者』
って意味だよ。」

天皇とか皇帝の別名で使われてたんだよ。」

ス「おくれている国の日本に、

お前の国は日が沈む場所、
って言われて
怒ったってこと？」

※プレイヤーに選択肢提示

【そうだと思う】

【違うと思う】

選択はどちらでも可能

主「・・・どうだろうね。」

2回目も失敗か・・・

でも年表には「記録なし」、
とはなってるなかったね。
どうしてだろう？」

ス「さすがに2回目は

ごまかせなかったのかな。」

鬼「さあそれはわからないけど、
外交音痴だった可能性は高いかも。」

主「ありがとう。助かったよ。」

※情報ファイルを赤に更新

※小鬼去る

主「集められる情報はこれだけかな。

正直、馬子さんに関する前向きな情報は
あまりなかったね・・・」

ス「作った制度は、自分の権力のため、
って感じが濃厚だし・・・」

主「それだけじゃなく、

外交音痴の可能性すらある・・・」



隋への使者(607年)

【日が昇るところの天子から
日が沈むところの天子に
お手紙を送ります】と手紙を送り
隋の皇帝を怒らせる。

- 581年 隋(ずい)が300年ぶりに天下統一
- 587年 馬子が物部守屋を滅ぼす
- 592年 馬子が崇峻天皇を殺害
その後、推古天皇即位
- 598年 隋が、高句麗(こうくり)へ第1回遠征
- 600年 日本から隋へ使者を送る？
(日本側には記録なし、中国側にはあり)
- 603年 冠位十二階を制定
- 604年 十七条の憲法を制定
- 607年 再び隋へ使者を送る
- 626年 馬子死去

ス「天国に帰りたいよ・・・」

主「ダメだよ。
やるしかないんだよ。」

※馬子と、物部や天皇のものと思われる怨霊に向かって

主「頑張ってみるね馬子さん。」

崇峻天皇や物部さんの怨霊も
あんまり馬子さんをいじめないでよ！

.....

ス「・・・無視だよ。
寝てるのかな？」

主「でも24時間無休怨霊システムだって言ってるのに。
とにかく勝負するしかないよ！」

ス「よし！」

アマテラス様のところへ行こう！

場面 裁判がスタート

主「弁護人、準備は完了しました。」

天「結構です。
裁判では、弁護側・検事側ともに
一人づつ証人が呼べます。
よく考えて選んでね。」

ス「アマテラス様・・・」

天「あらどうしたの？」

ス「僕ちよつと調子悪くて
電波がキャッチできないの。
証人の魂呼べないよ。」

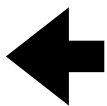
天「そうなの？
でも待って。
蛭ちゃんは、
天国から依頼を受けて
弁護を引き受けたのよね？」

主「はい。」

一人でも多くの
歴史上の人物を
天国に連れてきてくれて。
私、事情があつて、
その依頼を断れなくて・・・

天「そのあなたに、
調子の悪いスマミちゃんを
渡してきたの？」

閻「不思議なことではありません。
天国は今、経営難なのです。
だからこそ観光資源となる



歴史上の英雄を、
一人でも多く天国にあげたい。
それが天国の狙いなのです。」

天「天国も大変ね。
わかったわ。
証人の魂を呼ぶときは
閻魔ちゃんのスマミを
使わせてあげてね。」

閻「誰の魂を呼ぶのか。
私の方はすでに決まっています。
すなわち物部守屋の魂を召喚します。」

場面 スマミに頼んで、
証人の魂をよんでいる。
閻魔のスマミに砂嵐
魂の声だけが聞こえる

物部守屋の証言

守屋「どうか、馬子を永久に
地獄で罰してください。」

守屋「私は生前から
馬子にひどい嫌がらせを
受けていました。」

天「例えばどんな？」

守屋「ある儀式の最中に
私が緊張しながら挨拶していると
」鈴をついたらよくなりそうだ「
などと、皆の前で侮辱したのです。」

天「あらひどい！
ちよつとブルブルしてた
だけなのに。」

馬子「……お、おい……
も……も……り……や！」

ス「！？」

主「馬子さん……！
怒りのあまり覚醒した？？」

馬子「お前ぶざけるなよ！
それは元々お前が悪いんだろ！
剣を腰に刺した僕をみて、
」矢が刺さった雀「とか
言っただからだろお！」

天「身長の低さを
うまく取り入れた悪口ね。
何ハラに
なるのかしら。」

守屋「仏像なんてバカみたいに
握りしめて！」

馬子「うるやこー！
ご利益・・・あるのに・・・
ううう・・・うつつ・・・
うぐっ！」

ス「ああ！
また意識を失った！」

天「もお！！
まるで子供の喧嘩ね。」

守屋消える

閻「被害者の悲痛な声を
お聞きいただけただけでしょうか。」

鏡「恨みが溜まっているね。
当然か。」

・・・
・・・
蛭ちゃん。
どうしたの？」

主「！？」

あっ、ごめん。
なんだか一瞬
**守屋さんの発言に
違和感を感じて・・・。**

天「ところで閻魔ちゃん。
馬子ちゃんは
「天皇殺し」を
してるわよね。
どうしてなのかしら。」

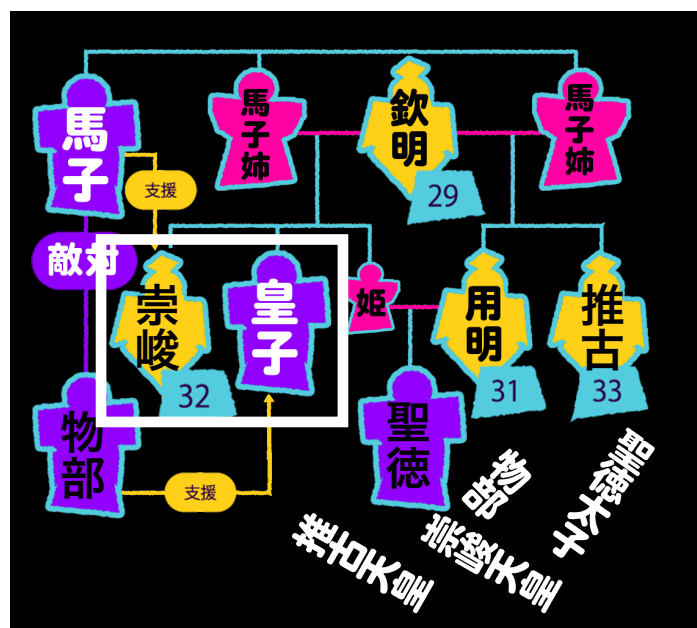
閻「順序を追って説明いたしましょう。
馬子がどれだけ身勝手なのか・・・
お分かりいただけるとと思います。」

閻「まず家系図をご覧ください。
閻「3」代用明天皇が崩御した時
後継者争いが起きました。
後継者候補が上がったのは
この二人でした。」

表示 家系図を表示

家系図の穴穂部と崇峻部分、赤枠で強調

閻「物部氏は穴穂部皇子と
繋がりが強く、
彼を支援しました。
それを気に食わない馬子は
崇峻天皇を支援したのです。
結局物部も穴穂部皇子も
馬子に殺されます。
そんな経緯で
崇峻天皇は即位したのです。」



天「わからないわね。
じゃあ二人は仲良しさん
だったんじゃないの？」

閻「馬子の残虐性を
甘く見てはいけません。
崇峻天皇は
馬子の言いなりでした。
そんな時に事件は起ります。
崇峻天皇に猪が献上されました。
日頃から不満が溜まっていた天皇は
『猪の首を切るみたいに、
あの憎い奴の首も切りたい』と
こぼしてしまつたのです。
それを聞いた馬子は
俺のことだ、と怒り
崇峻天皇を殺害したのです。」

主「また印象が悪くなる発言が・・・」

天「閻魔ちゃんの主張はわかりました。
馬子ちゃんの犯行は
極めて身勝手で残酷であると
言わざるをえません。
馬子ちゃんが地獄に落ちて
責め苦を受けていたのは
妥当な処罰だったと
言えるでしょう。
さて強ちゃん。
ここからが本当の歴史裁判です。
そこまでして奪った権力。
馬子ちゃんはそれで
何か歴史に貢献したでしょうか。」

閻「では本題に入りましょう。
すなわち、馬子に功績なし、
ということを確認して見せます。
年表をご覧ください、アマテラス様

天「鍵になるのは、
592年の天皇暗殺から
626年の馬子ちゃん死亡、
まづの出来事ね。」

閻「おっしゃる通りです。
私が主張するのは
603年 冠位十二階
604年 十七条の憲法
です。」

天「どんな制度なの？」
閻「とんでもない『身分制度』です。
まずは冠位十二階から
解説いたします。」

まずは閻魔・冠位十二階について発言

★閻「差別的な身分制度です。
人々を階級で分けるのです。」

- 581年 隋(ずい)が300年ぶりに天下統一
- 587年 馬子が物部守屋を滅ぼす
- 592年 馬子が崇峻天皇を殺害
その後、推古天皇即位
- 598年 隋が、高句麗(こうくり)へ第1回遠征
- 600年 日本から隋へ使者を送る？
(日本側には記録なし、中国側にはあり)
- 603年 冠位十二階を制定
- 604年 十七条の憲法を制定
- 607年 再び隋へ使者を送る
- 626年 馬子死去

書いてあります。」

★閻「しかしこの憲法は真逆。」

★閻「馬子の命令は絶対である、と書いてあるのです。」

★ス「また嘘が混じっているね。」

※馬子の命令は絶対である、と書いてあるのです。

の部分に証言カード「十七条の憲法」を提示

主「正確ではない情報が

混じっていますよ。

天皇に従え、と

書いてあったはずですよ。」

閻「ん？」

ああ。これは失礼。

そうだったような

気がするな。

しかしその違いは大した違いではありません。

天皇は馬子の身内・推古天皇です。

推古天皇に従えというのは、

自分に従えということです。

結局、自分の権力強化のための

道具にすぎません。」

主「(閻魔検事のやつ・・・

どっちにしても

自分に有利になると知ってて

さらに嘘までついてきてる。

こっちは知らなければ

もうけもの、ってことか。(」

天「なるほど。」

弁護士に反論はありますか？」

閻「天皇に隠れて

独裁的な政治体制を

作るうとしたわけですね。」

主「え・・・えっと。」

ス「どっしりよっ・・・

やっぱり調査で集めた情報通りだ。」

天「どっやん無いようですね。」

主「ちょ、ちょっと待ってください。」

天「ー？」

主「まだ、議論する余地は・・・

残っています・・・多分。」

ス「とにかくしつこく粘らないで。」

天「それは一体なんですか？」

主「私たちは今、
「**国の中の政治**」に関して
評価しました。
でも「**国の外に対する政治**」の
評価がされていません。」

天「つまり……
「**ついでに**」」

主「それは……」

※アイテム一覧から
「**隋への使者00**」「**隋への使者07**」のどちらかを提示

天「外交における功績ことですね？」

主「そ、そうです。」

ス「でもそれは、
あまりいい要素は
なかったような。」

主「でもこのままじゃ
終了だものー」

天「閻魔ちゃん、どう思いますか？」

閻「私はいけませんよ。
損するのは
弁護士側であることに
変わりはありません。」

天「では外交に関する議論に
進みましょう。」

※閻魔・遣隋使について

★閻「当時の中国は、**大国・隋**でした。」

★閻「**先進国・隋と国交を
結ぼうとしたのは、まあ結構。**」

★閻「しかし馬子は、『**日が昇る場所の天子から
日が沈む場所の天子に**』
などと手紙を
書いたのです。」

★閻「**隋の皇帝は当然怒りました。**」

★閻「**これが00年の失敗外交です。
記録に残せなくて当然ですなあ。**」

★主「……あれ？」

集めた情報と違う部分がある……」

ス「……」

主「……」

※
これが600年の失敗外交です。
記録に残せなくて当然ですなあ。
「隋への使者」カードを提示。

主「閻魔検事。」

また情報が間違っていますよ。
『日が昇る沈む問題』は
607年の外交の時です。」

閻「そ、そうだったかな・・・」

天「でも弁護士ちゃん。

じゃあ600年の記録は
なぜないの？」

主「それは決まっていますよ。」

600年は違う失敗をしたからですよ。
だから書けなかったんです・・・
・・・
あれ？」

ス「・・・。」

じゃあどうしてそれを
言わないんだろう・・・」

主「馬子さんは隋との外交で

多分2回失敗をしている。
それをわざわざ一つにまとめて
証言をした・・・」

ス「その理由は？」

※プレイヤー選択肢

【閻魔が間違えた】

【600年の外交で

隠したいことがある】

主「」(600年の外交は失敗だったけど、

閻魔検事にとって何か知られなくなる
要素があった？

・・・。

そこに・・・賭けるしかない！

アマテラス様。

弁護側は被告を弁護するために

ひとりの魂を召喚したいと考えます。」

天「蛭ちゃんも呼ぶのね。

誰を呼ぶのかしら？」

※プレイヤー選択肢

【物部守屋】

【隋の皇帝】

【ソング】

主「それは・・・600年の隋の皇帝です。」

天「・・・弁護側が招く魂は

馬子ちゃんを弁護してくれそうな人が
良いと思うけど。」

主「かまいません。」

馬子さんからの使者を

馬鹿にした皇帝を

呼ぶことを許可してください。」

天「まあ、私はかまわないけど。」

※閻魔のスマミ、隋の皇帝を招魂

スに頼んで、

証人の魂をよんでいる。

主「隋の皇帝陛下ですね？」

あなたはなぜ

日本の使者を馬鹿にしたのですか？

それを証言してください。」

※隋の皇帝による発言とさらに聞き込んだ場合の答え

★皇帝「お前の国の政治は

どんな制度だと聞いたのじゃ。」

皇帝「使者を見て「おかしいな」とは

思ってたんじゃよ。

公式の場での作法などを

あまり知らないようだったしな。」

主「なんだこの国は……って感じですね？」

皇帝「そうじゃよ。

すると案の定……。」

★皇帝「【天を兄として、日を弟としてい

る】などと意味不明な回答をしてきた。」

主「それはどんな意味ですか？」

皇帝「知らんよ。

こつちが聞きたいくらいじゃ。」

★皇帝「我が隋は、わしの命令一つで

大勢の民が動くような

理想的な国を作っておった。」

ス「典型的な独裁者だね。」

主「まあ、理想的な国かは

わかりませんがね。」

皇帝「なんじゃと！

ワシの命令一つで

大きな工事なども

できるんじゃぞ。

大きな運河を作ったりな。

経済も発展して

民も喜ぶじゃろっ。」

主「うん……まあ。」

★皇帝 「科挙(かきよ)すらやっていたのだ。」

主 「その「かきよ」とはなんですか？」

皇帝 「知らんのか？」

役人を試験で採用する制度じゃよ。

わしも死後に知ったんじゃが、

当時そんなことをしている国は

なかったらしいぞ。

有力者の子供が

は世襲するのが普通じゃからな。

お前の国もそうじゃった。」

★皇帝 「仏教も取り入れておったしな。

まさに最先端の超大国じゃ。」

主 「仏教ってそんなに凄かったんですか？」

皇帝 「インドからはるばる伝わった

最先端の教えじゃよ。

朝鮮半島を経由して

日本にも多少伝わったと聞いたが。」

主 「！？」

又 「どうしたの？ 蛭ちゃん！？」

主 「いや・・・ちょっと気になることが・・・」

全て聞いたから強制的に進む

天 「もう時間です。

これまでとします。」

主 「あ、ありがとうございます！」

※皇帝、消える

主 「(よしー多分つながった！)」

天 「あんまり弁護にならなかったわね。」

主 「いいえ。そんなことはありません。

情報をまとめてみよう。

皇帝の発言の中でこれとこれに

注目しよう。」

①我が隋は、わしの命令一つで大陸を貫くような大きな工事ができるほどまとまった政治をおとした。

②科挙(かきよ)すらやっていたのだ。

この2つの発言と関係がありそうな証言を選んでみよう。

※①には十七条の憲法

主 「隋の皇帝はすごい権力を持った

独裁者だったんでしょっね。

でもだからこそ大きな事業ができた。」

天 「誰かに権力が集中することは

独裁者を誕生させるかもしれない。
でも、国内は安定するし、
大事業を起こすのも可能になる、
というわけですね。」

※情報ファイル十七条の憲法書き換え

②には冠位十二階のファイル

主「今では能力主義は珍しくありません。
しかし当時は、世襲が当たり前でした。
冠位十二階には、欠点が多いです。
しかし当時は発想自体が
画期的だったのです！」

天「馬子ちゃんが一番だったりして
欠点がないわけではないけれど、
そもそもこれが作られたこと自体が
功績なのね。」

※情報ファイル冠位十二階書き換え

主「アマテラス様。

もう一度内政について
訂正があります。」

ス「ここは重要だよ。」

【十七条の憲法と冠位十二階は

国外からの視点を加えると
価値がわかってきます。
超大国・隋は、
能力主義と権力の集中を
取り入れた国家でした。

冠位十二階と十七条の憲法は
日本なりにこの2つを模倣した結果なのです。】

※この文章に空欄を設け、
プレイヤーに選択させる

主「600年の外交は記録に残せない程の失敗でした。
しかし馬子さんや推古天皇・聖徳太子達、
つまり当時のリーダー達は放置しませんでした。
そこで制定されたのが
2つの制度です。」

冠位十二階と十七条の憲法についての
閻魔検事の主張は、
物事の**一側面しか見ていない**
と言っているでしょう。
閻魔検事が外交に関して嘘をついたのは
『成功の元になった失敗外交』を
隠すためですね!。」

閻「だが、

607年の外交はどうだ！
とんでもない手紙を持参し
危うく国を滅ぼしかけたのだぞ！」

主「・・・果たしてどうでしょうか。」

閻「一〜二〜三〜四〜五〜六〜七〜八〜九〜十〜」

主「(これは予想に過ぎないけど)

強気にハツタリをかまさないと
馬子さんは、
隋は、日本を攻められないことを
知っていたのでは？」

ス「どうしてわかるの？」

主「年表のここを見れば・・・」

※年表の高句麗遠征を選択

主「隋は高句麗と敵対していました。
第1回遠征ということは
2回目もあるということです。
隋は苦戦していたのでしよう。
大陸の事情に
精通していた馬子さんは
今なら強気な態度を取っても
攻めてくることができないと
計算していたのです。
607年の外交は、
当時の国際状況を読み、
超大国隋と対等で強気な外交を展開した
「成功した外交」なのです！」

閻「と、とにかく！」

馬子は、残酷な犯罪者だ！
天皇・物部殺害事件で
それは明らかだ。」

天「閻魔ちゃん、それは違っんじゃないかしら。
その罪は消せないけれど、
それに見合う功績があるかどうかを
問うのが歴史裁判よ。」

閻「ぐっ・・・」

主「アマテラス様のいう通り。
ただ・・・
物部氏殺害に関しても
弁護することはできません！」

ス「！？そ、そんなの？」

主「やっとわかったんだよ。
違和感の正体が。」

ス「違和感！？」

主「アマテラス様。
先ほど守屋さんの発言に
違和感を感じていました。
守屋さんは、信仰心があつい人だった、
という証言が出ました。
閻魔検事もそう言っています。
しかし守屋さんは
**仏像なんてバカみたいに
握りしめて！**
と仏像をバカにするような
発言をしています。
私は不覚にも、

信仰心という言葉をよく考えようとせず、その人たちが具体的に何を信じているのか、を考えていませんでした。」

天「・・蚩ちゃん。話が見えてこないわね。」

主「裁判が始まる前、馬子さんに取り憑いている悪霊に話しかけました。しかし、返事がありませんでした。あれは崇峻天皇や守屋さんの悪霊ではなかったんです。」

天「・・つまり、蚩ちゃんは、何を証明しようとしているの?」

主「守屋さんと馬子さんの情報を思い出しながら、考えてみよう。馬子さんについている悪霊の正体は・・」



物部守屋(もののべもりや)
今回の被害者の1人。
日本の神話時代から続く名族。信心深い人で、宗教の行事なども担当していた。

蘇我馬子(そがのうまこ)
今回の被告。
仏像を大事に抱えて、意外に信心深い人のようだ。

※プレイヤー選択肢

【仏教の仏様】

【日本古来の神様】

【崇峻天皇】

【日本古来の神様】が正解

主「隋の皇帝の発言にもありましたが

仏教は海外から来た神様です。
しかし守屋さんが信じていたのは
その経歴から考えて、
「昔から日本にいる神様」
だったと思われれます。」

天「ひよっとして
馬子ちゃんと守屋ちゃんの
争いのもとになったのは・・・
どの神様を信じるのか、
という問題だったの？」

主「伝統を守るうとする守屋さん。
最先端の文化を取り入れ
世界に追いつこうとする馬子さん。」

天「二人とも真剣だったのね。」
ス「最後には子供の
喧嘩みたいになっただけど・・・」

主「もちろん権力争いもあるでしょう。
しかし単にお互いが嫌い
カッとなって殺した、
というわけではなんです。」

天「なるほど。
だからと言って
殺していいわけじゃないけど。
その点に関して
同情する点がある、
というわけね。」

閻「・・・」

天「弁護側の主張はわかりました。
馬子ちゃんの行いは
大いに身勝手ね。
でも、歴史において
非常に画期的な政治を
したことも事実であると
考えます。
減刑とします。
とはいえ罪人に変わりはありません。
天国では、罪滅ぼしとして
何かしらのボランティアに
従事することを命じます。
馬子ちゃんは仏教に熱心だったようですから
極楽の文化財の管理員を命じます

馬子と弁護士、最後に会話を交わして終わり。

馬子「た、助かった。
ありがとうございます・・・」

主「いいんだよ。
これが私たちの仕事だし。」

馬子「ありがとうございます・・・」

ありがとうございます・・・
仏様・・・」

主「え！？

ちよつと！

助けたの私たちなんだけど！！」

馬子「もちろんわかっているよ！

だから今、

君たちにめぐり会えたことを
仏像に感謝してたんذار。」

ス「な、なんか・・・」

主「いまいち納得できない・・・。

・・・まあいいかあ。」

ス「そつだよ。

「一体どうなるかと思つたもん。」

主「先が思いやられるけど」